

いわさきちひろ

執筆者：上島 史子

掲載誌：図録『いわさきちひろ展』 美術館「えき」KYOTO 2007年
アート・ベンチャー・オフィス ショウ

1章<子ども>

いわさきちひろは、生涯「子ども」を描き続けた画家でした。絵本や絵雑誌、教科書、育児書、広告などの印刷媒体を中心に、数千点にのぼる子どもの姿を描き出しました。「私には、どんなにどろだらけの子どもでも、ボロをまとっている子どもでも、夢をもった美しい子どもに、みえてしまうのです。」ということばは、彼女の子どもの見方が天性のものであったことを示しています。

母親となつてからは、息子という最高のモデルを得て、その日常のしぐさや日々の成長を鋭い観察力でみつめ、どんな格好をした子どもも描き出せるデッサン力を身につけていきました。肌の感触まで感じさせる生き生きとした表現は、子育ての実感から得たものでしょう。ちひろは次のように語っています。

「小さい子どもがきゅっとさわるでしょ、あの握力の強さはとてもうれしいですね。あんなぼちゃぼちゃの手からあの強さが出てくるんですから。そういう動きは、ただ観察してスケッチだけしていても描けない」。わが子へのあふれるような愛情は、「子ども」という存在すべてへと向けられ、未来への希望に満ちた尊い命を守りたいという願いへとつながっていきました。

また、「子どもを描いていると、自分の小さいころを描いているように感じる」と自ら語っているように、だれもがもっていたはずなのに、大人になるにつれて見失いがちな子どもの心を、ちひろは失うことなく表現した人でした。大人にとってはささいなことにも、大きな驚きや興味、喜びや悲しみを感じ、想像の世界に羽ばたくこともあった子ども時代のやわらかな感覚を、絵のなかの子どもたちはみる人の心に呼び覚まします。

没後 33 年を経た今もなお、ちひろの絵をみると、わが子や孫、幼いころの自分自身と重なるという人が多くいます。いつの時代も変わることはない普遍的な「子ども」そのものが描かれているからこそ、その絵は今も親しい存在として受け入れられているのでしょう。

2章<デッサン・スケッチ>

いわさきちひろの表現を支えているのは、どんな格好をした人物も描き出すことができたデッサン力です。のこされた膨大なデッサンやスケッチを年代順にみていくと、そのデッサン力はたゆみない努力によって培われてきたことがわかります。

第二次世界大戦が終結した翌年の 1946 年 5 月、27 歳だったちひろは疎開先の長野県松本市から東京に戻り、画家を志して本格的に絵の勉強を始めます。昼は人民新聞社で絵の描ける記者として働きながら、夜は日本共産党宣伝部が主催する芸術学校で 3 ヶ月間学びました。丸木位里・赤松俊子(丸木俊)夫妻のアトリエで行われていたデッサン会にも参加するようになり、働

きながら絵を志す若者たちとともに、人物デッサンに打ち込みました。赤松は、アカデミックな手法にとらわれず、対象の一番印象的なところから描くことや、間違えたからといってすぐに線を消さず、自分がひく一本の線にも責任を持つことを教えていました。いつも紙と鉛筆を持ち歩いていたこの時期のデッサンからは、自分の線を模索して、さまざまな画風を試みていたようすがうかがえます。1951年に母親となってからは、日々成長していく息子が格好のモデルとなりました。次第に活発に動き回るようになるわが子を描きとめたスケッチは、画家としての鋭い観察力と、母親のあたたかなまなざしを感じさせます。

1960年代からは旅先でのスケッチが多くなります。信州をはじめとする日本各地のスケッチの他、のちの絵本の仕事に大きな影響を与えることとなった1963年のソビエト（現・ロシア）旅行、1966年のヨーロッパ旅行でのスケッチなどが多数残されています。目にした風景や人物をすばやく描きとめた折々のスケッチをみると、ちひろがなにに目を留め、心惹かれたかがわかると同時に、各時代の線の特徴や変化を知ることができます。

3章〈絵本〉

いわさきちひろは画家を志した当初から、より多くの人に楽しんでもらえる絵を描きたいと、印刷美術の世界に進みました。1956年、37歳だったちひろは「こどものとも」12号として、最初の絵本『ひとりのできるよ』（福音館書店）を発表します。子どもの本といえば、絵雑誌や紙芝居、児童文学の単行本が主流だった当時、毎号ひとつの物語にひとりの画家が絵を描く月刊の物語絵本「こどものとも」は、画期的な企画でした。

絵本に取り組む出版社が増加し、盛んに絵本が出版され始めた1960年代半ばから、ちひろの絵本の仕事は急激に増えていきます。1967年に夫が衆議院議員に初当選するなど、生活の上でも多忙を極めた時期でしたが、ちひろの絵本制作への意欲は高いものでした。ちひろは絵本についての考え方を次のように語っています。

「さざなみのような画風の流行に左右されず、何年も読みつづけられる絵本を、せつにかきたいと思う。もっとも個性的であることが、もっとも本当のものであるといわれるように、わたしは、すべて自分で考えたような絵本をつくりたいと思う。そして、この童画の世界からは、さし絵ということばをなくしてしまいたい。童画は、けしてただの文の説明であってはならないと思う。その絵は、文で表現されたのと、まったくちがった面からの、独立したひとつのたいせつな芸術だと思うからです」。

若い人を対象に、自分の好みの文学をモノトーンで描いた童心社の「若い人の絵本」シリーズや、説明的な要素を省き、最小限の絵とことばで主人公の少女の心の動きを表現した至光社の絵本シリーズなど、ちひろは独自の絵本を次々に生みだしていきました。物語絵本が主流であった戦後の絵本の草創期に、ちひろが追求した新たな絵本表現は、後の日本の絵本にひとつの指針を示したといえるでしょう。生涯に発表された40冊あまりの絵本の多くが、今も版を重ね、親から子へ、子から孫へと読み継がれています。